音声教育の研究と実践

国際教養大学　Akita International University
鮎澤 孝子　ayusawa@aiu.ac.jp

１．はじめに

２．音声教育の研究課題

２．１．日本語音声に関する研究

（１）日本語音の音韻体系と子音の音声
（２）韻律特徴の記述
（３）連続音声の記述

２．２．日本語音声の教授法に関する研究

３．音声教育の実践

３．１．学習者の母語別音声教材

３．２．共通問題のための教材

（１）拍
（２）アクセント

３．３．学習者からのフィードバック

４．おわりに

2004.11.13.（土）13:10-14:15
第２回『日本語教育と音声』研究会
早稲田大学西早稲田キャンパス

音声教育の研究と実践

国際教養大学　Akita International University
鮎澤 孝子

１．はじめに

ほとんどの日本語学習者は日本語が話せるようになりたいと思って日本語を習い始めるのであるから、日本語教師のほとんどが日本語音声教育に携わることになる。日本語教師にとっても、日本語学習者にとっても、音声はまず入門段階での課題になる。 しかし、まだ語彙も文法もあまり学んでいないレベルの学習者では音声教育も限られた範囲にとどまることになるので、中級、上級レベルに進んだ段階での音声教育も必要となる。日本人のように日本語を話したいという上級レベルの学習者の要望にも応えなければならない。

音声教育においては、何をどのように教えるのかということになるが、日本語教科書では日本語の音声は、初級教科書のはじめのほうに五十音図を使った単音レベルの説明やアクセント型の説明などがあり、音声テープや CD での練習となる。あとは、文型練習の例文の練習が音声の練習を兼ねることになる。中級・上級レベルの聴解や話し方の練習教材も作られているが、特に、日本語母語話者に違和感を与えないような話し方のための中級・上級レベルの音声教育教材というようなものはあまり見ない。上級レベルになると日本人のような話し方を習得したいという学習者も多くなるが、そのような学習者向けの教材や指導法の開発などはまだ今後の課題ということができるだろう。そのための研究課題は、まだ、いろいろ残されていると言える。

２．音声教育の研究課題

日本語音声教育の課題はいろいろ残されており、それらの課題はみな研究テーマとして取りあげられるべきものであるが、研究の課題は大きくふたつに分けられる。日本語音声そのものについての研究と教授法に関する研究である。

２．１．日本語音声に関する研究

（１）日本語音の音韻体系と子音の音声

外来語の原音に近い発音をするためとして、従来の五十音図に含まれていなかった子音が日本語に加わってきている。そのような音を含む拡大五十音図が提案されているが、現代日本語においてどのような音を認定するのが妥当であるのか、現代語の音韻体系はどうなっているのか、また、実際にはどのような発音がなされているのかの調査が必要である。

ファ行の子音に[f]を使うことも多いようだという報告もある。外来語の表記では、ヴァ行音、クァ行音などが使われているが、ヴァ行、クァ行の子音などの実際の発音はどうなのか、スィ音はどのぐらい定着しているのかなどの調査研究も必要であろう。

このような調査のための録音、音声分析が容易にできるようになっており、主観的な聴覚印象での記述ではなく、客観的な記述が可能になっている。

（２）韻律特徴の記述

韻律特徴、つまり、アクセントやイントネーション、プロミネンス、リズムなどは、その言語の言語らしさを醸し出す要因であると言われるが、日本語の韻律特徴の記述はまだこれからと言えるだろう。従来はその特徴を記述するにしても、聴覚印象に頼らざるをえず、客観的な記述が出来ていなかった。しかし、現在ではパソコンで音声分析ソフトによって音

声の抑揚を記録することは容易である。このデータをどう分析するのがよいのかはまだこれからの課題と言えるだろう。この領域での研究が今後大いに行われることを期待したい。

（3）連続音声の記述

話ことばの音声について、単音レベルでの発音方法や音声の特徴の記述という枠を超えて、実際の発話中でそれぞれの音声が前後の音環境や発話速度や発話場面など外的な要因によってどのように変化するのかという研究も必要である。

母音の無声化と発話速度や音環境との関係とか、発話速度と母音の長さの関係とか、ポーズの長さと発話速度の関係とか、現代日本語の話し言葉のさまざまな側面の実態調査が必要であろう。このような調査もパソコンでの音声分析が可能となり、実施しやすくなっている。このような調査結果から初級者と上級者の日本語の違いがどんなところにあるのかというような指標が見えてくるのではないだろうか。

２．２．日本語音声の教授法に関する研究

教授法の研究はその成果の検証が困難である。つまり、効果的な教授法であってもそれを立証することが難しい。同じ学習者に対して、他の教授法で教えたときの効果がどうであったか比較することはできないし、異なる学習者から得られた結果を比較しても、教授法の違いが結果の違いと関係があるのかわかりにくい。しかし、いろいろな教授法を開発し、学習者が意欲的に取り組みたくなるような教材を考案することは重要である。

特に、最近はパソコンが普及し、音声分析ソフトが容易に利用できるようになったので、それを利用した音声教育の教授法が開発されることが期待される。モデル音声や学習者自身の音声をパソコンに保存し、それを聞き比べたり、視覚的に提示して比較したりすることもできれば、いつでも、どこでも、日本語音声の学習が可能となる。日本語母語話者の教師がいなくても、自学自習で日本語音声が習得できる。

教授法に関する研究では、教材に関する研究ばかりではなく、どのような要因が学習者の音声習得の動機づけに影響を与えるのかというような研究もあるだろう。同じ教材であっても、フィードバックや評価の方法、ペアワーク、グループワークなどの学習形態の違いなど、学習者が意欲的に取り組もうとする要因を明らかにすることも重要である。

３．音声教育の実践

音声教育の現場においては、できるだけ学習者にとって楽に日本語音声が習得できるような教材と教授法が望まれる。そのためには、無駄のない教材で、学習者に必要なことだけを練習させるという工夫が必要である。学習者はすでに母語で十分コミュニケーションができる。つまり、母語の音声の生成は無意識にできるのであるから、その利点を生かし、母語と日本語の音声の相違点を知り、日本語の特徴を習得してもらえればよい。但し、学習者の母語と日本語の音声の相違点を知ると言っても、学習者の母語は多様であり、簡単なことではないのは確かである。

３．１．学習者の母語別音声教材

母語の音声と日本語の音声との相違点に焦点を絞った音声教育というと、学習者の母語の音声についての知識が必要になる。これはさまざまな母語の学習者をかかえる日本語教師にとっては困難なことであり、さまざまな言語の専門家の助けが必要である。その言語の音声の特徴を日本語音声との比較において記述してもらいたい。その言語話者にとって日本語音声のどのようなところが習得困難であるのかがわかれば、それに対応した教材を準備できる。さまざまな母語の学習者が混在する日本では学習者の母語別の対応は困難であるが、海外での日本語教育であればその地域の言語に対応した教材が準備できる。その地域の言語母語話者で日本語と母語の音声についての知識を持つ者が、最近の日本語音声の研究成果を取り入れた作成した教材がいくつかの母語で開発されている。

（1）中国語母語話者対象：『語音詳解』朱春躍、 2001 年 10 月
（2）韓国語母語話者対象：『日本語音声学入門』閔光準、2002 年
（3）アラビア語母語話者対象：『エジプト人のための日本語音声』ハナーン・ラフィーク、2004 年 7 月

今後もさらにこのような学習者の母語別教材が開発されることを期待したい。

３．２．共通問題のための教材

学習者の母語別の教材が望ましいが、さまざまな母語の学習者に共通する日本語音声の習得困難点もある。日本語にかなり特有な特徴であり、他の言語には見られないような特徴としては、特殊拍、高低アクセントなどがある。

（1）拍

多くの言語において発音の単位は 音節 （syllable）であり、拍（mora）の単位をもたない。そのため、日本語でも拍を無視して音節単位で発音してしまう。「ほん」のような２拍語を１音節の [hon] で発音する。母音を鼻音化するだけだったり、[n]が短すぎたりする。そこで拍感覚を養うためにということで、「ほ」、「ん」、というように手をたたくという方法も取られるが、行き過ぎると、実際の日本人の発音とは異なる発音の仕方を教えてしまうことになる。このような共通問題について、学習者にとって分かりやすい教材が開発されれば、多くの学習者にとって役立つものとなる。日本人の実際の発音についての研究と学習者の問題点についての研究が必要である。「ん」を長くするという指導よりも、「ほ」の母音を短くするほうが、日本語らしくなるのかもしれないからである。

（2）アクセント

日本語の高低アクセントの習得も多くの学習者にとって習得困難点になっているが、単語ごとのアクセント型を覚えるのが難しいのか、アクセント型を聞き取ることが難しいのか、アクセントを生成するのが難しいのか区別し、それぞれの練習をするようにすれば取り組みやすい。聞く練習、言う練習、アクセント型を覚える練習に分ける。アクセント型は個別に覚えるしかないが、語の種類によってはアクセント型は推測しやすい。外来語や複合語などは類推がしやすい。アクセント型のルールを知って、アクセント型を聞きとる力がつけば、アクセント型の習得が進むことになる。

学習者を支援する側としては、このような共通する問題点について整理し、モジュール化した教材を準備しておけば、学習者に合わせて、どのような練習メニューを組み合わせたらよいかが想定できる。練習のためには、学習者が必要とするような語彙を選び、実践的に役立つようなものにする工夫がほしい。

３．３．学習者からのフィードバック

教育現場の強みは、学習者からのフィードバックが得られることである。テストやクイズなどの結果を見ると、習得状況がわかり、間接的なフィードバックを得ることができるが、学習者から直接にどのような説明がわかりやすいか、どのような練習が有効かなど、フィードバック、評価を得ることもできる。学習者と教師との双方向のやりとりで、教材、教授法を開拓していくことができるというところが現場の楽しみといえる。そのような情報を参考にして、教材を開発したり、学習者の母語の音声と日本語の音声を比較するなど、さまざまな研究テーマも見つかる。教育現場は研究テーマをみつけるためにも大事な現場である。

４．おわりに

「日本語音声教育の教育と実践」の結果というと、学習者の音声が上達するということである。音声の上達は、すぐに表に現れるものであるから、学習者にとっても教師にとっても嬉しいことである。この喜びのために研究も実践も大いに進めていきたい。

外来語のための50音図 04.10. AIU

	a	i	u	e	o	ya	yu	yo
	ア	イ	ウ	エ	オ			
k g	カ ガ	キ ギ	ク グ	ケ ゲ	コ ゴ	キャ ギャ	キュ ギュ	キョ ギョ
p b	パ バ	ピ ビ	プ ブ	ペ ベ	ポ ボ	ピャ ビャ	ピュ ビュ	ピョ ビョ
n m r	ナ マ ラ	ニ ミ リ	ヌ ム ル	ネ メ レ	ノ モ ロ	ニャ ミャ リャ	ニュ ミュ リュ	ニョ ミョ リョ
h ÷ B	ハ ＊ファ ＊ヴァ	ヒ ＊フィ ＊ヴィ	 フ ＊ヴ	ヘ ＊フェ ＊ヴェ	ホ ＊フォ ＊ヴォ	ヒャ	ヒュ ＊フュ ＊ヴュ	ヒョ
Σ dZ, Z	ｼｬ ｼﾞｬ	シ ジ	シュ ジュ	＊シェ ＊ジェ	ショ ジョ			
s dz, z	サ ザ	＊スィ ＊ズィ	ス ズ	セ ゼ	ソ ゾ			
t d	タ ダ	＊ティ ＊ディ	＊トゥ ＊ドゥ	テ デ	ト ド		＊テュ ＊デュ	
tΣ	ﾁｬ	チ	チュ	＊チェ	チョ			
ts	＊ツァ	＊ツィ	ツ	＊ツェ	＊ツォ			
w	ワ	＊ウィ		＊ウェ	＊ウォ			
y	ヤ		ユ	＊イェ	ヨ			
kw	＊クァ	＊クィ		＊クェ	＊クォ			
N	ン							

21世紀の50音図 2004.4.

	a	ア	i	イ	u	ウ	e	エ	o	オ				
k g	ka ga	カ ガ	ki gi	キ ギ	ku gu	ク グ	ke ge	ケ ゲ	ko go	コ ゴ	kya gya	キャ ギャ	kyu gyu	キュ ギュ	kyo gyo	キョ ギョ
p b	pa ba	パ バ	pi bi	ピ ビ	pu bu	プ ブ	pe be	ペ ベ	po bo	ポ ボ	pya bya	ピャ ビャ	pyu byu	ピュ ビュ	pyo byo	ピョ ビョ
n m	na ma	ナ マ	ni mi	ニ ミ	nu mu	ヌ ム	ne me	ネ メ	no mo	ノ モ	nya mya	ニャ ミャ	nyu myu	ニュ ミュ	nyo myo	ニョ ミョ
r	ra	ラ	ri	リ	ru	ル	re	レ	ro	ロ	rya	リャ	ryu	リュ	ryo	リョ
h	ha	ハ	ci	ヒ			he	ヘ	ho	ホ	hya	ヒャ	hyu	ヒュ	hyo	ヒョ
F V	Fa Va	＊ファ ＊ヴァ	Fi Vi	＊フィ ＊ヴィ	Fu Vu	フ ＊ヴ	Fe Ve	＊フェ ＊ヴェ	Fo Vo	＊フォ ＊ヴォ			Fyu Vyu	＊フュ ＊ヴュ		
S j	Sa ja	シャ ジャ	Si ji	シ ジ	Su ju	シュ ジュ	Se je	＊シェ ＊ジェ	So jo	ショ ジョ						
s z	sa za	サ ザ	si zi	＊スィ ＊ズィ	su zu	ス ズ	se ze	セ ゼ	so zo	ソ ゾ						
t d	ta da	タ ダ	ti di	＊ティ ＊ディ	tu du	＊トゥ ＊ドゥ	te de	テ デ	to do	ト ド			tyu dyu	＊テュ ＊デュ		
tS dj	tSa dja	チャ ヂャ	tSi dji	チ ヂ	tSu dju	チュ ヂュ	tSe dje	＊チェ ＊ヂェ	tSo djo	チョ ヂョ						
ts dz	tsa dza	＊ツァ ヅァ	tsi dzi	＊ツィ ＊ヅィ	tsu dzu	ツ ヅ	tse dze	＊ツェ ヅェ	tso dzo	＊ツォ ヅォ						
kw gw	kwa gwa	＊クァ ＊グァ	kwi gwi	＊クィ ＊グィ			kwe gwe	＊クェ ＊グェ	kwo gwo	＊クォ ＊グォ						
w	wa	ワ	wi	＊ウィ			we	＊ウェ	wo	＊ウォ						
y	ya	ヤ			yu	ユ	ye	＊イェ	yo	ヨ						